

廣雅釋詁

廣雅釋詁

一

廣雅

諸橋轍次 鎌田正 米山寅太郎 著

廣漢和辭典

上卷

大修館書店

広漢和辞典 上巻

昭和五十六年十一月三日 初版発行
昭和五十七年三月十日 初版第三刷発行

著者 諸橋 轍次

鎌田 正

米山 寅太郎

発行者 鈴木 敏夫

発行所 株式会社大修館書店

東京都千代田区神田錦町三ノ二四
電話 〇三二九四一三三 振替東京九四〇三〇四

© T. Morohashi 1981 Printed in Japan
3581-030810-4305

内部交流

S 49/17(沪)

広漢和辞典 上巻

(日 6-2/80-A)

A 01230

序

漢和辞典の大成によつて漢字文化の理解と普及を図りたいというのは、私の畢生の願いである。さき大漢和辞典を公刊したのはそのためであり、固より全力を傾け最善を期した作品ではあるが、何分にも戦中戦後、万事混迷不如意の當時のこととて、刊成りてのち内省すれば、幾多意に満たぬものを感じる。これは是非とも機を待つて補正すべきだと、第十二巻巻末の跋文に明記した。その素志に従つて爾來二十余年、営々事に当たつて來た。幸いにも大修館書店はもちろん、幾多の諸君の献身的努力によつて、補正の原案は漸次整備されつつある。ただ大漢和辞典の性質上、一時に完璧を求めることは至難であり、この補正の作業は永遠に継続されていくであらう。

さて、今度刊行することになった大漢和辞典は、大漢和辞典が余りにも浩瀚にして一般の利用には繁に過ぎるであらうかとの見解のもとに、上記補正の作業と関連しながら、更に簡にして要を得、広く現代一般社会人の言語生活にも適合できる辞典をという要望に応えんとして、新たに編纂したものである。固より私は老齡その任に耐えないので、私の信賴する鎌田 正・米山寅太郎の両君を中心とし、多数の方々の積極的協力を得て編纂をすすめてきた。

今、本辞典の内容についていえば、即ち現代學術研究の必要性和一般社会人の要請に立つて、漢字・漢語を全面的に吟味精選するとともに、広韻を基本として漢字の音韻を明らかにし、近時の研究による甲骨金石学や音韻学の成果をふまえ、漢字の字形や音声の時代的變遷を掲げ、特に音義の類似性に基づく語家族を設定して漢字の語源的説明を詳らかにし、あるいは我が国王朝時代における

る漢詩文の語彙を採録し、更には漢籍からの引用に尽く返り点・送り仮名を施して読解の便を図り、漢字の排列や検出にも新工夫を用いる等、幾多の配慮と創意を加えた。いうならば本辞典は、大漢和辞典の新たな分身であり、これまた大約二十年の所産である。

近時、東洋文化の再認識が要望されるおりから、学術の研究はもちろんのこと、広く一般社会の方々が本辞典を利用され、漢字文化の理解と新しい文化の創造に資せられるならば、私の幸いこれに過ぎるものがないであろう。

今年、偶々白寿を迎えたるこの機会に、本辞典の刊行を見るに至ったことは、私の最も欣快とするところ、一言もって序とする。

昭和五十六年十一月三日

白寿翁 諸橋 徹 次 識

凡例

編集方針

- 1 本辞典は、諸橋轍次著「大漢和辞典」(全十三巻、昭和三十五年)を基本とし、東洋における漢字文化の理解と研究ならびに現代社会における言語生活上必要と見られる漢字・漢語を精選し、漢字の形・音・義と漢語の語彙に関する正確な知識を、専門家はもとより広く一般社会人に提供する目的をもって編集したものである。

収録範囲

- 2 親字は、漢籍に用いられる文字、および一般社会生活の常用字を中心とし、国字・異体字などを含め二万余字を精選したが、特に次の文字はすべて収録した。

ア 「説文解字」所載の文字

イ 常用漢字表および人名用漢字別表の文字

ウ 中国の簡化字総表の第一表・第二表の文字

- 3 熟語は、「大漢和辞典」から漢籍に用いられる漢語を精選して採録したほか、特にわが国王朝時代の懷風藻・勅撰三集・菅家文草・同後草・和漢朗詠集・本朝文粹・同続文粹などから独自の造語とみられる漢語を新たに採録し、漢字で表記される和語をもつとめて収めた。また、格言、故事成語、漢詩文の名句、人名・書名その他の百科項目も豊富に掲げた。熟語総数は約十二万語である。

親字の字体

- 4 常用漢字・人名用漢字の字体は、それぞれ常用漢字表(昭和五十六年十月一日、内閣告示)・人名用漢字別表(昭和五十六年十月一日、法務省令)によった。

- 5 前項の字体が旧来の字体(旧字体)と異なるばあいには、常用漢字・人名用漢字の字体(新字体)の下に、旧字体を対照して掲げた。

⑥ 辞 ⑤ ジ ⑫ 辭 ⑬ 辭
16972 やめる 16973

新字体

旧字体

- 6 常用漢字・人名用漢字以外の親字の字体は、「康熙字典」および「大漢和辞典」に基づき、また中国の簡化字については印刷通用漢字字形表(一九八四年、中国文化部・中国文字改革委員会)によった。

- 7 常用漢字・人名用漢字、あるいはその旧字体が、「康熙字典」で俗字・同字(別体)などとされているばあい、「康熙字典」の正字体をも対照して掲げた。

① 氷 ④ ヒヨウ ④ 氷 ④ 氷
8429 こおりひ 8430 正字

⑬ 霸 ⑬ ハ ⑬ 霸 ⑬ 霸 ⑬ 霸
15504 15505 15506 正字

- 8 常用漢字で採用されている新字体が、元来は音・義の異なる別の文字であるばあい、①②……の番号をもって親字見出しを立て、字義も分けて記した。

⑪ 缶 ⑩ カン ⑩ 罐 ⑩ 罐
13000 13001 カン(クワン)

⑩ 缶 ⑦

- 9 本辞典における字体の区別は、次の通りである。

ア 本字 「説文解字」(以下「説文」と略称)の篆文を楷書に改めた文字で、原字に比較的近い形体をとるもの。
イ 古字・籀文 字書・韻書、特に「説文」に、古文または籀文、あるいは「古」に作るなどと記された文字。

ウ 同字(別体字) 字書・韻書に、「…に同じ」「或いは…に作る」などと記された文字。同音・同義で、成り立ちの上で異なる形体

をとるもの。或体ともいう。本辞典中、IIの記号で示す。

工 俗字・誤字 字書・韻書に、俗字または譌字、あるいは「俗に作る」などと記された文字。一般に俗字は、誤字よりも通行する範囲が広く、その多くは字画の省略された略字である。

オ 簡化字 中国の簡化字総表（一九四九年）で定めた文字、および第一批異体字整理表（一九五五年）で選ばれた文字の中で字画の著しく簡略なもの。

カ 新字体・旧字体 当用漢字字体表（昭和二十四年四月二十八日、内閣告示）・常用漢字表・人名用漢字別表において新たに定めた字体を新字体といい、それ以前に通行していた字体を旧字体という。

親字の排列と見出し

10 親字の排列は、部首順に、同部首内では画数順に、同画数内では起筆法（第12項参照）によった。

11 部首の種類および排列は「康熙字典」に基づいたが、検索の便を図って次の点を改めた。

ア ッ部を新設し、新字体のうち従来の部首に分類し難い単・巢・宮・巖などの字を取めた。その他の新字体について、もとの部首の形が失われた文字は、それぞれの字形的特徴により従来の部首の範囲で新たな所属を定めた。たとえば、聲（耳部）の新字体の声は士部に、與（臼部）の新字体の与は一部に収めたことなどである。

イ 次の部首は分離した。

刀・リリ 犬・オオ 水・シシ 心・小小
手・才才 火・ハハ 網・四四 肉・月月
衣・ネネ 邑・ヨヨ 阜・ヨヨ

分離した部首は、画数にかかわりなく、もとの部首のすぐ後に置いた。これらは部首本来の文字が漢字の偏・傍・冠・脚になるばあいに変化した形である。

ただし、网部から分離した四部には、もと网部の罍・罪などの文字のほか、もと目部で四の形をもつ罍・罍・罍などの文字もある。

わせ収めた。

また、肉部から分離した月（肉月）の文字は、月（つき）部に移し収めた。

このようなばあい、親字見出しの上にもとの部首を表示した。

四 5 罍 13066

目 6 眾 13071

月 7 望 6953

肉 7 脱 6955

ウ 次の部首は統合した。

匚がはえ・匚がくし 久・久く 日ひ・日ひ

エ 匚・文は、新字体でそれぞれ匚・文に改められたもので、常用漢字の範囲では形体上の区別がない。このばあいにも、前項と同じく、親字見出しの上にもとの部首を表示した。

「康熙字典」の部首分類が合理性を欠き、あるいは検索上不便と認められる文字については、適宜、部首を移した。たとえば、之はもとのノ部3画から、部2画へ、巡はもとのㄩ部4画から彡部3画に移したことなどである。

12. 同画数内の親字の排列は、起筆（第一筆）の形により、次の方法で定めた。筆順の始めに部首があるばあいは、その形を除いた第一筆を起筆とする。

ア 起筆の形を次の五種に分け、順序をつける。

- ①、（ノを含む）…点
- ②、一（ノを含む）…横
- ③、丨（丨を含む）…縦
- ④、ノ…撇（左はらい）
- ⑤、㇀（㇀・フ・レ・乙を含む）…折れ

右の順序は、永字の筆順と筆形を応用したものである。

イ 右の順序により排列を定める。起筆が同じ文字は第二・第三筆を同様に順序つけて排列し、以下は五十音による。人部5画を例にとれば、次のような排列になる。

13 佗行位住……休余余佞……但快命但……佚作佐佈
……怡伺伽侶
親字見出しの体裁は、次の通りである。

【果】⁷²⁷⁵ ④カはたすはてるはて果物⁷²⁷⁵
ア……イ……ウ……エ……オ……カ……

ア 画数 所属する部首内の画数

イ 親字

ウ 親字番号 すべての親字に付した一連番号

エ 常用漢字 常用漢字表にある文字

オ 常用漢字音調 常用漢字表で認められた音調。片かなは音、平が

なは訓、平がなの細字は送りがなの部分を表す。

カ 熟字訓 常用漢字表の付表で認められた当て字や熟字訓。

キ その他の記号

④ 人名用漢字 人名用漢字別表にある文字。

【国字】 国字……わが国で作られた漢字。

参照見出し

14 部首のまぎらわしい文字には参照見出しを立て、本来の所属部首と親字番号を示して、容易に検索できるようにした。参照見出しは、字形としてめだつ部分、筆順として始めにくる部分を目安として立てた。たとえば、夜は夕部5画に所属するが、上部6画に参照見出しが立てられている。

【夜】²²⁹³ ヲ夕部……2293

所属部首 親字番号

画数の数え方と起筆のとり方

15 画数の数え方、および起筆法による筆形のとり方は、「筆順指導の手

びき」(昭和三十三年三月、文部省)を参考として次のように定めた。
臣は、従来は6画であったが、起筆は1とし、7画に数える。姫、監などの画数にも適用する。

イ 止・足が他の文字の構成部分となって止・足の形をとるとき、従来はもとの字より1画少なく数えてそれぞれ3画・6画であったが、もとの字と同じ4画・7画で統一する。

ウ 亟・極・糸・姉・与・與などに含まれるウの形は、従来は2画であったが、弓・弓などのばあいと同じく、1画で統一する。

エ 之を従来のノ部3画・総4画から、部2画・総3画に改めたことにより、芝・乏・泛などの諸字に含まれる之の形も3画に数える。

オ 上・止の起筆は1とし、叔・洩などに含まれる上・止の起筆にも適用する。

音 韻

16 字音は、漢音・呉音・唐音・慣用音をあげ、片かなで、現代かなづかいによって表記した。歴史的かなづかい(旧字音)がこれと異なるばあいは、(一)に入れて記した。

17 漢音・呉音は、両音が異なるばあい漢音・呉音の順に、上下または左右に併記し、同じばあいには単記した。

【一】 イツ・イチ 漢音 呉音
【京】 ケイ……キョウ(キヤウ)…… 漢音 呉音

【五】 ゴ……漢音・呉音、同じ

18 唐音・慣用音は、それぞれ④の記号をもって示した。
19 韻および反切は、「広韻」を基本とし、「集韻」その他の韻書と字書によって補った。ただし、韻の分類は百六韻とした。
20 韻目は□で囲み、四隅に小円をつけて声調(四声)を示した。

□……平声 □……上声 □……去声 □……入声

21 現代中国語音は、漢字拼音方案(一九五八年)によってローマ字で表記

た。

30 同字・通用字の関係を示すのに、次の記号を用いた。

ア II : 「II A」は、親字がA字と同音・同義であることを示す。

(例) 【坂】さか。II 阪。

イ 介 : 「介 B」は、B字が親字の意味に使われることを示す。

(例) 【深】①寒氣のきびしい形容。……③介栗。

ウ ↓ : 「↓ C」は、親字がC字の意味に使われることを示す。

(例) 【栗】①くり。……⑤さむい。↓深。

参 考

31 主に字形や用字、その他の参考事項を、【参考】の見出しの下に掲げた。

解 字

32 上古音(周・秦・漢代)・中古音(隋・唐代)・近世音(元・明代)・現代音を、それぞれ①・②・③・④の記号をもって記し、音韻の變化を示した。音声記号に付した1・2・3・4の数字は声調を表すが、上古・中古音と近世・現代音とで、その表す声調は次の通りである。

(上古・中古音) 1…平声 2…上声 3…去声 無印…入声
 (近世・現代音) 1…陰平声 2…陽平声 3…上声 4…去声
 上古・中古音における入声音は、韻尾に-p・-t・-kの音を持つことから判明するので、番号を省略した。

33 甲骨文・金文、および「説文」所載のすべての篆文(小篆)・或体(別体)・古文・籀文を掲げて字体の變化を示し、六書と文字の構成ならびに原義を記した。会意および形声は、次のように記した。

ア 会意。A + B : AとBの合字であることを示す。

イ 形声。A + B 声 : Aが意符、Bが声符であることを示す。また、B省声とするものは、Bの省略体が声符であることを示す。

34 解字を施した文字のうち、上古音の類似と意味の共通性および字形を考慮して、同系統にあると認められる文字(語)のグループを「語

家族」としてまとめ、代表となる文字の下に置いた。たとえば、青の字義は「あおい」であるが、青の語家族に属する星・清・精・晶・晴・淨などの諸字とは上古音が類似し、「すみきっている」という共通の意味を持つ同系統の語として、一つのグループをなしている。

ア 同一の語家族に属する文字を「一」に入れて掲げ、その上古音を記した。

イ 語家族内の文字に共通する基本義をへんに入れて示し、総合的な語源解説を施した。

ウ 語家族内の代表字以外の諸字には、Vの記号をもってその代表字と親字番号とを記し、語家族と基本義を参照できるようにした。

35 解字欄を設けた親字の範囲は、「説文」所載の文字、常用漢字、人名用漢字である。また、音韻の變化は、語家族にまとめられた文字の範囲で掲げた。解字欄に関する文字・音韻・語家族などの説明は、付録の解説を参照されたい。

名 乗 ・ 難 訓

36 わが国の人名、また姓氏・地名に用いられる特別な読み方を、それぞれ【名乗】・【難訓】の見出しの下に掲げた。

熟 語 の 排 列 と 見 出 し

37 熟語は、字数や画数にかかわらず二字めの字音によって五十音順に排列した。訓読みする熟語もその字音によったが、字音のない国字は、そのままの読みによって排列した。また、返読する語句で親字が下にきて返り点がつくものは末尾に置いた。

38 見出し漢字の二字め以下の文字に、常用漢字・人名用漢字以外の文字があるばあい、△印を付して示した。

【白・楊】びやうよう。

39 見出し漢字は、新字体があるものは新字体を用い、二字め以下の文字に新・旧字体の著しく異なるものがあるばあい、旧字体を()に入れて示した。

【經濟(濟)】ケイ

40 二字め以下の常用漢字の字体に対し、出典・引用文の中でその正字や別体(第7項参照)が用いられているばあい、(一)に入れ*印を付して示した。

【堅氷(氷)】ケンヒョウ……〔漢書、揚雄傳上〕漢ニ堅氷ニ犯ニ嚴淵ニ

41 同一の文字で始まる同音・同義の熟語は、一つの見出しの中にまとめた。これらの文字は、同字・正字・古字・俗字など、あるいは互いに通用する関係にある文字である。

【宴游・宴遊】エンユウ

【専一・専壹(壹)】センイチ

熟語の読み方と説明

42 読み方は、音読みは片かなで、訓読みは平かなで、現代かなづかいによって表記し、歴史的かなづかいがこれと異なるばあいは、(一)に入れて示した。ただし、熟語の一字めの字音かなづかい(旧字音)は省略した。

【歡樂(樂)極兮哀情多】カンラクキョクシヤイセイタ

43 読み方が二通り以上あるばあいは、次のように記した。

ア 読み方が異なっても意味が同じものは並記した。

【尊崇】スンジュン

イ 読み方によって意味が異なるものは分けて記し、意味と対応させた。

【人間(間)】カン ①人の世。……②ニンひと。

44 熟語に二つ以上の意味があるばあい、①②③……、またその中を⑦①②……、④②⑥……の順をもって意味を分けて記した。また、仏教語には④、現代中国語には⑤の記号を付した。

同義語は、原則として説明の末尾に加えたが、二つ以上の意味がある熟語ではその一々の末尾に置かず、説明の冒頭に掲げた。また、同義語の参照をもって説明を省略するばあいは、Ⅱの記号を用いて参照する語を示した。

46 反義語は、↑の記号を付して示した。

47 説明の補足・参考のために他の熟語を参照する必要があるばあい、↓の記号を用いて参照する語を示した。

48 人名には、生没年を西暦で、(一)に入れて説明の末尾に記し、中国の史書に伝記があるものには、その書名と巻数を(一)に入れて示した。

49 また、王朝名には、成立と滅亡の年、および参考になる史書名を同様に記した。

「倭名類聚抄」「類聚名義抄」に見られる古訓のうち参考になるものを、それぞれ④・⑤の記号を付して記した。

出典・引用文および訓読

50 親字・熟語には、漢籍にその出所を求め得たもののすべてに出典を掲げ、熟語については国文古典の出典もつとめて掲げた。

51 出典・引用文は歴史的に古いものを優先して採録し、著名なもの、説明・用例としてふさわしいものを適宜加えた。特に字義の説明において、「説文」は段玉裁の説文解字注本によって全文を引用した。

52 出典の排列は、原則として成立の古い順から歴史的に排列したが、辞書類はその他の出典の前に掲げた。

53 出典名は(一)に入れて示した。

ア 書名には、編目を記した。

イ 詩文名には、作者の時代と作者名を記した。

ウ 「文選」所収の詩文には、文選と記し、作者の時代名を省略した。

エ 詩の題名には、原題に詩・歌・行など詩であることを表す語がないばあい、「詩」の字を付した。

54 書名および注釈を記す上で用いた略称の主なもの次は次の通りである。

ア 書名

説文…許慎の説文解字

通訓…朱駿声の説文通訓定声

玉篇…大広益会玉篇

イ

注釈（原注および代表的な注釈のみを掲げる。）

春秋…春秋の経文
左氏…春秋左氏伝
公羊…春秋公羊伝
穀梁…春秋穀梁伝
逸周書…汲冢周書
呂覽…呂氏春秋
晏子…晏子春秋
魏志…三國志、魏書
蜀志…三國志、蜀書
吳志…三國志、吳書
注…易経の王弼・韓康伯注
周礼…儀礼・礼記の鄭玄注
春秋左氏伝の杜預注
春秋公羊伝の何休解詁
春秋穀梁伝の范甯集解
孝経の玄宗御注
孟子の趙岐注
爾雅の郭璞注
荀子の楊倞注
老子の王弼注
荘子の郭象注
史記の三注（裴駰集解・司馬貞索隱・張守節正義）
漢書の顔師古注
後漢書の章懷太子注
楚辭の王逸注
文選の六臣注（李善・呂延濟・劉良・張銑・呂向・李周翰の注）
傳…書経の偽孔安國伝
詩経の毛亨伝

箋…詩経の鄭玄箋

疏…五経正義の孔穎達疏

周礼正義・儀礼正義の賈公彦疏

春秋公羊伝注疏の徐彦疏

春秋穀梁伝注疏の楊士勛疏

孝経注疏・論語注疏・爾雅注疏の邢昺疏

孟子正義の孫奭疏

南華真経（莊子）注疏の成玄英疏

本義…朱熹の周易本義

蔡伝…蔡沈の書経集伝

集伝…朱熹の詩経集伝

集解…何晏の論語集解

皇疏…皇侃の論語義疏

集注…朱熹の論語集注・孟子集注・楚辭集注

章句…朱熹の大学章句・中庸章句

釈文…陸徳明の經典釈文

繫伝…徐鍇の説文繫伝

段注…段玉裁の説文解字注

義証…桂馥の説文解字義証

句詁…王筠の説文句詁

会箋…竹添光鴻の毛詩会箋・左氏会箋・論語会箋

55

漢文の引用には、口語体の文章（白話文）などで訓読し難いものを除き、全文に返り点・送りがなを施し、かつ難読字には読みがなを適宜付して、読解の便をはかった。訓読の文体は、簡潔を旨とした。

56

送りがなのつけ方は、おおよそ次の規則によった。

ア 活用語は、原則として活用語尾から送る。

イ 自動詞・他動詞の読みわけを明らかにするばあいには、語幹から送る。

ウ 他（例）当タル 連ナル 驚カス
他の語とまぎれやすい語や難読の語は、語幹から送る。

エ 文末の助辞は、慣習によつて読むことを原則とし、送りがない。
 (例) 見ハル(見ル) 食ラフ(食フ) 擅マニス

(例) 一、初也(なり) 亦不樂乎(や)

已矣哉(かな)

オ 再読文字について、二度めに返つて読む部分(動詞・助動詞的な読み)の送りがなは、原則として最後の二音を送る。

(例) 當ニ勉勵ス。(まさニ……ベシ)

未ニ足ニ與議一也。(いまタ……ザル)

未・將の終止形には送らない。

(例) 未ニ覺池塘春草夢。(いまタ……ズ)

天將以夫子爲木鐸。(まさニ……ス)

カ 日(いはく)・云(いふ)・謂(いふ)などに呼応する「と」は、そのかかる部分が引用文の途中で終るばあいには送り、文末では省略する。

(例) 帝嘗問曰、創業守文孰難……玄齡曰、創業則難。(……いはク、……かたキト。……いはク、……かたシ。)

逆引き熟語

57 親字が下につく熟語の例を、字義欄の後に、○の記号を付して掲げた。

図版

58 親字・熟語の説明の理解に資するため、図版を掲げ、その出典を記した。

索引・付録

59 見返しに部首索引、巻首に各巻所載の総文字を掲げた。その他の索引および付録は、別巻に掲げた。別巻の索引・付録は、次の通りである。

索引：総画索引・字音索引・字訓索引・中国語音索引・四角號碼索引・熟語五十音索引

付録：常用漢字表・人名用漢字別表・中国簡化字一覧・文字音韻解説、その他

主な記号一覧

① ……常用漢字。常用漢字表で認められている音・調・熟字訓をその下に記す。

人 ……人名用漢字

唐 ……唐音

慣 ……慣用音

□ ……声調。上から順に、平声・上声・去声・入声を示す。□の中には韻目(百六韻)を表す韻字が入る。

上(中)近 ……解字欄で、上から順に、上古音・中古音・近世音・現代音を示す。

仏 ……仏教語

現 ……現代中国語

和 ……倭名類聚抄の訓

類 ……類聚名義抄の訓

|| ……同字。また、同義。

↑ ↓ ……通用字

↑ ……意味が反対になる文字・熟語

↓ ……を参照せよ

△ ……熟語見出しで、常用漢字・人名用漢字以外の文字を示す。

▽ ……解字欄で、語家族の代表字を示す。

〔 〕 ……出典

へ ……解字欄で、語家族の基本義を示す。

夕 102 𠂆	厂 101 𠂆	ナ 100 𠂆	乂 99 𠂆	メ 98 𠂆	メ 97 𠂆	一 画 一	人 96 𠂆	乚 95 𠂆	乚 94 𠂆	丿 93 𠂆	丿 部	𠂆 上 𠂆 (雨上𠂆)	七 画 七	𠂆 上 𠂆 (𠂆上𠂆)	六 画 六	𠂆 92 𠂆	五 画 五	(永中𠂆)	
(升上𠂆)	(午上𠂆)	(之上𠂆)	𠂆 114 𠂆	𠂆 113 𠂆	𠂆 112 𠂆	三 画 三	(千上𠂆)	(九上𠂆)	𠂆 111 𠂆	及 110 𠂆	久 109 𠂆	久 108 𠂆	么 107 𠂆	𠂆 106 𠂆	义 105 𠂆	二 画 二	(九上𠂆)	人 104 𠂆	乃 103 𠂆
𠂆 123 𠂆	乔 122 𠂆	𠂆 121 𠂆	五 画 五	(𠂆中𠂆)	(𠂆上𠂆)	(𠂆上𠂆)	(丘上𠂆)	乐 120 𠂆	𠂆 119 𠂆	𠂆 118 𠂆	𠂆 117 𠂆	𠂆 116 𠂆	𠂆 115 𠂆	四 画 四	(𠂆上𠂆)	(𠂆上𠂆)	(天上𠂆)	(壬上𠂆)	(王上𠂆)
八 画 八	(𠂆下𠂆)	(𠂆上𠂆)	𠂆 130 𠂆	七 画 七	(我中𠂆)	(兵上𠂆)	(兎上𠂆)	𠂆 129 𠂆	六 画 六	𠂆 128 𠂆	𠂆 127 𠂆	𠂆 126 𠂆	𠂆 125 𠂆	𠂆 124 𠂆	𠂆 123 𠂆	𠂆 122 𠂆	𠂆 121 𠂆	𠂆 120 𠂆	𠂆 119 𠂆
(𠂆上𠂆)	十三 画 十三	𠂆 140 𠂆	十二 画 十二	𠂆 139 𠂆	𠂆 138 𠂆	𠂆 137 𠂆	𠂆 136 𠂆	十 画 十	兼 (955) 𠂆	𠂆 135 𠂆	乘 (132) 𠂆	九 画 九	(重下𠂆)	(𠂆中𠂆)	(𠂆上𠂆)	𠂆 134 𠂆	𠂆 133 𠂆	𠂆 132 𠂆	乘 131 𠂆
四 画 四	(孔上𠂆)	(𠂆上𠂆)	𠂆 152 𠂆	𠂆 151 𠂆	三 画 三	也 150 𠂆	乞 149 𠂆	𠂆 148 𠂆	凡 147 𠂆	𠂆 146 𠂆	二 画 二	𠂆 145 𠂆	九 144 𠂆	一 画 一	𠂆 143 𠂆	𠂆 142 𠂆	乙 141 𠂆	乙 部	乙 部
𠂆 167 𠂆	𠂆 166 𠂆	八 画 八	(𠂆下𠂆)	𠂆 165 𠂆	𠂆 164 𠂆	𠂆 163 𠂆	𠂆 162 𠂆	𠂆 161 𠂆	𠂆 160 𠂆	𠂆 159 𠂆	𠂆 158 𠂆	𠂆 157 𠂆	𠂆 156 𠂆	𠂆 155 𠂆	𠂆 154 𠂆	𠂆 153 𠂆	𠂆 152 𠂆	𠂆 151 𠂆	𠂆 150 𠂆
𠂆 177 𠂆	二 画 二	𠂆 176 𠂆	一 画 一	𠂆 175 𠂆	𠂆 174 𠂆	𠂆 173 𠂆	𠂆 172 𠂆	𠂆 171 𠂆	𠂆 170 𠂆	𠂆 169 𠂆	𠂆 168 𠂆	𠂆 167 𠂆	𠂆 166 𠂆	𠂆 165 𠂆	𠂆 164 𠂆	𠂆 163 𠂆	𠂆 162 𠂆	𠂆 161 𠂆	𠂆 160 𠂆
十五 画 十五	𠂆 187 𠂆	十一 画 十一	(𠂆中𠂆)	(𠂆上𠂆)	𠂆 186 𠂆	𠂆 185 𠂆	𠂆 184 𠂆	𠂆 183 𠂆	𠂆 182 𠂆	𠂆 181 𠂆	𠂆 180 𠂆	𠂆 179 𠂆	𠂆 178 𠂆	𠂆 177 𠂆	𠂆 176 𠂆	𠂆 175 𠂆	𠂆 174 𠂆	𠂆 173 𠂆	𠂆 172 𠂆
互 202 𠂆	𠂆 201 𠂆	𠂆 200 𠂆	𠂆 199 𠂆	𠂆 198 𠂆	𠂆 197 𠂆	𠂆 196 𠂆	𠂆 195 𠂆	𠂆 194 𠂆	𠂆 193 𠂆	𠂆 192 𠂆	𠂆 191 𠂆	𠂆 190 𠂆	𠂆 189 𠂆	𠂆 188 𠂆	𠂆 187 𠂆	𠂆 186 𠂆	𠂆 185 𠂆	𠂆 184 𠂆	𠂆 183 𠂆
𠂆 215 𠂆	𠂆 214 𠂆	𠂆 213 𠂆	𠂆 212 𠂆	𠂆 211 𠂆	𠂆 210 𠂆	𠂆 209 𠂆	𠂆 208 𠂆	𠂆 207 𠂆	𠂆 206 𠂆	𠂆 205 𠂆	𠂆 204 𠂆	𠂆 203 𠂆	𠂆 202 𠂆	𠂆 201 𠂆	𠂆 200 𠂆	𠂆 199 𠂆	𠂆 198 𠂆	𠂆 197 𠂆	𠂆 196 𠂆

[illegible]

休 320 二六	仝 319 二六	仝 318 二六	傳 317 二五	佖 316 二五	會 315 二五	会 314 二五	伐 313 二五	伏 312 二五	伋 311 二五	伉 310 二五	忖 309 二五	伙 308 二五	伞 307 二五	仿 306 二五	伉 305 二五	四画		(佞上二五)	仞 304 二五	他 303 二五
件 340 二六	件 339 二六	仉 338 二六	份 337 二六	佂 336 二六	价 335 二六	众 334 二六	伶 333 二六	仲 332 二六	佂 331 二六	企 330 二六	佂 329 二六	伙 328 二六	优 327 二六	假 326 二五	佂 325 二五	伏 324 二六	佂 323 二六	伍 322 二六	伎 321 二六	
佇 355 二七	佂 354 二七	五画		(休中二七)	(余中二七)	(从申二六)	(合上二五)	佂 353 二七	佂 352 二七	伊 351 二七	仔 350 二七	仰 349 二七	伉 348 二七	役 347 二七	伙 346 二七	佂 345 二七	佂 344 二七	伤 343 二六	伙 342 二六	任 341 二六
体 375 二七	休 374 二七	休 373 二七	估 372 二七	征 371 二七	佂 370 二七	佂 369 二六	餘 368 二七	余 367 二七	余 366 二七	佂 365 二七	佂 364 二七	佂 363 二七	佂 362 二七	伴 361 二七	伴 360 二七	佂 359 二七	住 358 二七	住 357 二七	位 356 二七	
但 395 二八	伸 394 二八	但 393 二八	但 392 二八	但 391 二八	佂 390 二八	佂 389 二八	佂 388 二八	佂 387 二八	佂 386 二八	似 385 二八	佂 384 二八	佐 383 二八	佂 382 二八	佂 381 二八	佂 380 二八	佂 379 二八	何 378 二八	佂 377 二八	體 376 二七	
伽 414 二八	佛 (279) 二八	伺 413 二八	佂 412 二八	佂 411 二八	你 410 二八	佂 409 二八	佂 408 二八	佂 407 二八	低 406 二八	佂 405 二八	佂 404 二八	伯 403 二八	佑 402 二八	佈 401 二八	佂 400 二八	作 399 二八	佂 398 二八	佂 397 二八	佂 396 二八	
佂 429 二八	佂 428 二八	佂 427 二八	佂 426 二八	併 425 二八	併 424 二八	佂 423 二八	佂 422 二八	佂 421 二八	佂 420 二八	依 419 二八	佂 418 二八	佂 417 二八	六画		(佂中二八)	(巫上二八)	(坐上二八)	(含上二八)	母 416 二八	侶 415 二八
佂 448 二八	例 447 二八	佂 446 二八	佂 445 二八	來 (7215) 二八	佂 444 二八	佂 443 二八	使 442 二八	價 441 二八	佂 440 二八	佂 439 二八	佂 438 二八	侍 437 二八	佂 436 二八	佂 435 二八	佳 434 二八	佂 433 二八	佂 432 二八	佂 431 二八	佂 430 二八	
佂 468 二八	佂 467 二八	佂 466 二八	佂 465 二八	佂 464 二八	佂 463 二八	佂 462 二八	佂 461 二八	佂 460 二八	佂 459 二八	佂 458 二八	佂 457 二八	佂 456 二八	佂 455 二八	佂 454 二八	佂 453 二八	佂 452 二八	佂 451 二八	佂 450 二八	佂 449 二八	
七画		(拿下二五)	(佂中二七)	(佂上二五)	(含上二五)	佂 483 二九	佂 482 二九	佂 481 二九	佂 480 二九	佂 479 二九	佂 478 二九	佂 477 二九	佂 476 二九	佂 475 二九	佂 474 二九	佂 473 二九	佂 472 二九	佂 471 二九	侮 470 二九	侮 469 二九
佂 503 二九	佂 502 二九	佂 501 二九	佂 500 二九	佂 499 二九	佂 498 二九	佂 497 二九	佂 496 二九	佂 495 二九	佂 494 二九	佂 493 二九	佂 492 二九	佂 491 二九	佂 490 二九	佂 489 二九	佂 488 二九	佂 487 二九	佂 486 二九	佂 485 二九	佂 484 二九	